ころばぬ先の杖のゆくえ

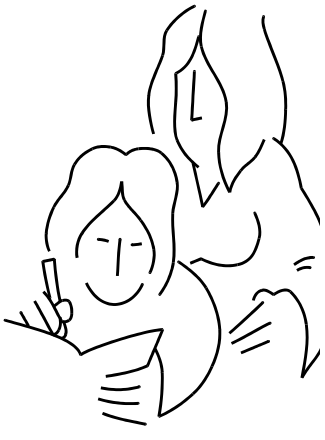
松本　康子

前回、ナルちゃんを取り巻く環境は、「ころばぬ先の杖」に囲まれていると書きました。
私自身がわが子に差し出した「杖」のゆくえは、これから先が見えてくるのでしょう。

日本で暮らした年月より数年上回ったアメリカは、私にとって第二の故郷と言ってもいいでしょう。昨日、そのアメリカで新たな歴史を刻んだ第44代大統領選挙結果を、一時帰国中の日本で知りました。インターネットで、オバマ氏の勝利宣言の全文を読み、私の子ども達が「女性初の大統領」発言をした時の、アメリカン・ドリームの一端に浴していることを実感し、感慨深いものがあります。

＜大統領選挙とマイノリティの女の子＞

小学生の頃の子ども達が「将来、何になりたいの」と聞くと、3人が3人とも“First Lady President（女性初の大統領）”と答えたことがあります。私が何気なく質問したことに対し、子ども達が同じ答えを出したことに驚き、再びその理由やアメリカの教育の一端を教えられることになりました。



アメリカの大統領選挙中はどの学年のどのクラスでも、授業の一環の一つに、民主党と共和党の2人の候補者側に分かれ、支持する立場や反対する理由をディベイトするといいます。候補者の主張から国策とは何かを勉強すると共に、国を導くリーダーを作るのはアメリカ市民一人一人なのだという考え方を、学校教育で教えているのでしょうか。また、アメリカの歴史の中でマーチン・ルーサー・キング牧師について習いますが、“I have a dream.”という、彼の有名な演説の意味を考えさせ、誰にもその権利があると教えられるとも。夫がよく言う「アジア人というマイノリティでしかも女の子ということが、この国ではハンディではなくチャンスなのだ」と教育されます。その可能性が、今回の大統領選挙で証明されました。

私は、子ども達に教授される教育が現実に生かされないなら、何のための教育かしらと考える人間です。その上で、「子どもの将来がどうあってほしいか」ということが動機となって、家庭での子育てについて試行錯誤していました。そうした時の、子ども達の「女性初の大統領」発言を発端に、アメリカでの子育ては、今まで自分がイメージしていたようなことではすまない、と気づき始めました。

＜Tax Payerの権利と義務＞

学校で先生やお母さん達と話をすると、「Tax Payer（納税者）」という言葉をよく聞きます。納税者なのだから、学校教育も例外なく参加する権利があり、それは義務なのだと。その例の一つに、納税者の意見を反映するために毎年、先生と保護者が一緒になって、カリキュラムの一部を見直しする、というのがあります。英語をハンディとする私でも実際に、サイエンス・フェアや社会科のイベント、ESLプログラムなどに関する新年度案作りに協力させられたことがあります。迂闊なことに、この頃やっと、アメリカと日本の教育ではまったく異なる大事なことを知ります。それは、私の住むカルフォルニア州（州で異なる）では、キンダーから高校を卒業する18歳までが義務教育だという点でした。

子ども一人にかかる年間の教育費を調べてみると、その当時は5,500ドル～6,500ドル（California Department of Education, Budget per Studentより）で、3人の子どもが義務教育を終えるまでの総額は、20万ドル以上にもなります。私は娘たちが高校を卒業するまでの教育費を1ドルも払ったことがなく、州からの補助金やそのほとんどが市町村の固定資産税という財源から賄われたのです。そう考えると、私の子ども達は、まじめに税金を納める人たちに支えられた教育なのだと実感する、貴重な体験でした。でもそうすると、子ども達や私自身の「義務」もあるはずで、それは一体何だろう。それは何も特別なことではなく、「社会へ還元する市民」となることであり、そのように子育てすることだと考えたのです。

＜よき市民＞

私の思い込みから始まった子育てに対する考え方ですが、近い将来、実社会で「社会へ還元する市民」となるには、家庭で出来ることや私自身の能力にはかぎりがあり、一体何をどうしたらいいのか。幸い、子ども達自身の言葉から、1日のほとんどを過ごす学校には尊敬すべき先生がたくさんいることや、学ぶことが楽しいらしいことがうかがわれ、素晴らしい教育環境にあることは確かなようです。